

私の名前は水姫さやか。先日〇5歳になったばかりの〇学三年生です。見ての通り真面目なタイプで、視力も悪く分厚いメガネをしていますし、制服も校則違反にならないよう、充分な長さのスカートを着用しています。勿論、可愛い恰好をしている同級生に憧れは無いとは言いません。ですが、元々地味な私が、そんな世界に憧れた所で意味が無いので、自分の得意分野である勉強で成果を出したいと思い頑張っています。

：以前までは、そんな風に考えていました。

【友達】「さやか、おはよう〜！ 今日もクソ真面目な恰好してるね」

【さやか】「おはよう。別にいいじゃないの。これが私なんだから…」

【友達】「いやいや、あのイメチェンした姿、滅茶苦茶可愛いんだから勿体ないよー！」

友達のその言葉に私はドキドキしながら、その時の事を思い出していました。



しばらく前、私は友達に無理やり更衣室に連れ込まれて、そこで髪型を変えられ、服を変えられ、コンタクトを入れられました。



そして目の前の鏡には、いままでの地味で真面目な私とは全然違って目のぼうちりした、ポニーテールでミニスカートの活発そうな明らかに自分らしくない美少女が映し出されていました。



その外見に少しドキドキしながら校舎を歩いていました。不意に吹き込んだ風にスカートをめくられ、ノーパンのお尻を男子に見られてしまいました。

男子は私の正体に気づいていませんでした。私は見られた事で思わず興奮してしまい、そのままトイレでオナニーしてしまいました。



イメチェンしていれば正体がバレないと気付いた私は、見られる事の気持ちよさをもっと満たすために、自撮りをしました。

さやか@■■■■年生  
初めまして、さやか都内の〇学校に通うといったーをはじめ写真などアップしたよろしくお願いします



そして自撮り写真をSNSにアップした所、物凄い勢いで拡散され、万単位のリフォロワーがつかってしまいました。

そして夜になり、SNSのフォロワー相手に生配信を行いました。興奮した私は、自らの割れ目を見せつけてしまいました。



それでさらに興奮した私は、競泳水着姿で外出し、そんな私の後を付けてきた浮浪者を公園に誘い、レイプして欲しいとお願いをしました。



そして浮浪者相手に処女を喪失し、中出しされる様子を、SNSで全国に配信しながら、絶頂を経験しました。

そこから調子に乗った私は、ノーパンテニスウェアで配信しました。  
その時に現れた少年達相手に、クスコで子宮を見せつけた所、  
彼らは面白半分にトイレフラッシュを突っ込んできました。

その後、夜の公衆トイレで\*\*とセックスする動画を配信していた所、  
その様子をのぞき見していたおじさんがいたので、

そのおじさんをつまえて拘束し、  
お仕置きに逆レイプして精液を搾り取ってやりました。



その後、さらに調子に乗った私は、私のファンを集めてコスプレ撮影会を開催しました。

バニーガール姿での撮影会でしたが、当然普通の撮影では終わらず、オマンコを見せつけ、さらにはフェイスブックされる様子までファンの皆さんに撮影させる事になりました。

そして採取的には、ファンの皆さんが私を見て射精した精液を集めそれをシリンジに詰め込んで、全て私の子宮に注ぎ込んでもらいました。



【友達】「…さやか？ どうしたのさやか、ポーっとして」

【さやか】「あっ…ごめんごめん、ちよっと考え事してたからポーっとしてた…」

【友達】「何が楽しみな事でもあるの？ ずっとニヤニヤしてたけど」

友達に声をかけられ、妄想の世界から戻ってきた私は、頬が緩んでいた事に気が付きました。私がこんな変態行為をしているという事を、絶対にバツるわけにはいきません。

【さやか】「…それじゃあ私、もう帰るから…」

ポロが出る事を恐れた私は、友達と別れ足早に学校を出て行きました。

私が私ではなくなってしまうような、あまりにも可愛らしい姿へと変身する時の高揚感。

そして、その可愛らしい女の子が、大勢の前で信じられないような変態行為をする背徳感。

さらに、その女の子を思い通りに出来るのが、他でもない自分自身であるという事の征服感。

そんな歪んだ快樂に、真面目に辺倒だった私は、すっかりハマってしまいました。



そして夜になってから、両親の目を盗んで、こっそり夜の街へと出かけます。日ごろ真面目な私は両親から信用されており、まさか夜中に出歩くななんて思ってもいません。もし見つかったとしても、メイクして髪形も服装も変えた私に、両親すら気が付かないでしょう。その証拠に、夜の街へと出かければ、いつもは見向きもされない地味な私が、大勢の通行人の人達の注目の的になります。



【通行人】「うおっ…あのポニーテールの子、めちゃくちゃ可愛いな…」  
【通行人】「○学生くらいかな…でもこんな時間に出歩いてるわけないか…」  
【通行人】「地下アイドルとかかな…それともそういうお店の子かな…」

そんな通行人のひそひそ話が、遠くから私の耳へと飛び込んできます。

この一部始終は、私のファンの二人が飛ばしている小型ドローンで撮影録画されており、

その配信内容は小型イヤホンを通して、私の耳にも入ってきており、自動的に配信もされています。

こんな状況で、今日はどんな事が起きるのか。私はドキドキしながら、夜の街を散歩します。



そして、そのまま街の奥、怪しい店が立ち並ぶエリアまで来た時の事でした。酔っ払いと思われる、ガラの悪い男3人が、私の前に立ちはだかっただのです。

【男】「おお？ こんな時間に女子校生か？ よく見るとすっげえ可愛いじゃん」

【男】「今から一緒に個室カラオケ行こうぜ。大丈夫大丈夫、何もしねえから」

【男】「そんな短いスカートでこんな所歩いて、誘ってるんだろ？ ほら、行こうぜ」

【さやか】「えっ……？ わ、私は……」

【視聴者】「ナンパ男キター！」

【視聴者】「これはレイプフラグの予感……！」

男達だけでなく、視聴者も盛り上がっていますが、私も少しドキドキし始めています。

でも、このまま男達の誘いに乗った所で、普通にセックスされておしまいです。

それでは正直面白くないので、私は少し考えて、男達を挑発してみました。



「さやか」 「…お兄さんたち、もしかして私とセックスしたいんですか？」

でも残念、私はまだ〇学生なので無理なんです。

せめて家でシコンシ出来るようにお土産をプレゼントしますね」

私はそう言った後、その場でパンツを脱いで、目の前の男に投げつけました。

男は当然、青筋を立てています。



「男」 「…コイツ…ガキだと思って優しく接してりや…」

「男」 「…そうか、無理やり犯されるのが好みって事か。面白れえ…」

「視聴者」 「うわ、挑発すげえ！ さやかちゃんやりすぎでしょ！」

「視聴者」 「これは完全にレイプされるコースですわ。ワクテカ！」

そして頭に血が上った男達は、当然私を捕まえようとしませんが、私はその場から逃げ出します。勿論、本当に逃げるためではありません。男達が私をレイプしやすい場に誘導するためです。

私はそのまま、街のさらに奥、人が寄り付かないような路地裏へと逃げ込みます。  
男達は私以上に町の構造を知り尽くしているようで、二手に分かれて私を追い詰め、  
そして私はまんまと路地裏の行き止まりへと追い詰められてしまいました。

【さやか】「うぐっ…はあっ…はあっ…」



【男】「へへっ！鬼ごっこは終わりかよ？ 思ったよりあっけねえな？」

【男】「おあつらえ向きにノーパンだし、ここからはお楽しみタイムだぜ？」


【さやか】「う…ま、まさか本当に…レイプするつもりじゃないですよね…？」

私、まだ〇学生なんですよ…？ そんな事…！

【男】「女子〇学生とはヤツた事ねえから楽しみだわ。ほら、抵抗したいならこうさっさとSSM！」

男はそうやってニヤニヤした表情を浮かべながら私に詰め寄ってきます。

私は一応、抵抗する素振りを見せるため、その場で大きく足を蹴り上げました。




【ぎやか】「……のっ！ えいつー！」  
【男】「へへっ……可愛いしい割れ目が丸見えになってるぜ？」

私のキックなんか当たるはずがありません。  
男は簡単に避け、受け止め、私が蹴り上げるたびにめくれあがるスカートの中をニヤニヤ見つめています。

【男】「まさか毛も生えて無いとは、マンで〇学生なのが「イン」  
【ぎやか】「っ！ み、見ないでっ……！」

そして何回目かの蹴り上げの後、私は男に足首を掴み上げられてしまいました。  
私は丸見えになったオマンコを隠す事も出来ず、その場でもがくしかありません。



私はそのまま壁へと押し付けられ、完全に身動きが取れない状態になりました。男のうち、一人はそのまま私の足を掴み上げたまま、もう一人が私の前にしゃがみ込んで、私の割れ目にその指を伸ばし、這わせてきました。

【男】「コレが○学生のマン」が。びっちり閉じてて

めちやくちや締まりよさそうじゃん

【さやか】「やめっ…ひっ…」

男はそのまま私の割れ目に指を這わせるように愛撫をしてくれます。

私がどれだけ嫌がる演技をしようとも、すでに開発されきった私の体は、正直に反応して、割れ目を開いて愛液を溢れさせていきました。



【男】「へえ、コイツもう感じてるじゃん。

こんなに体をビクンビクンさせて、  
愛液滲ませて、実は変態かてめえ？」

【ぎやか】「ち、違う…ひっ！」

【男】「処女がどうか確かめてやるよ」

男はそう言って、愛撫をやめて私の割れ目を左右に開きました。

同時に膣口からは愛液があふれ出し、地面に向かって糸を引きます。

【男】「なんだ、処女膜無えじゃねえか。可愛い顔してやる事やってんのかよ」

【ぎやか】「うぐっ…そ、それはっ…」

男は「ヤニヤ」しながら、私のオマンコを開き、その奥までじっくりと観察してきました。



【男】「で、お前の初めての相手は誰だ？」  
【ぎやか】「やめっ……！ ひあっ……！」

男はそう言って、私の膣口に中指をねじ込みました。  
そのまま慣れた手つきで、膣内の性感帯をゴリゴリと刺激してきます。

【男】「ほら、言えよ。クラスメイトか？ それともヤリチンか？」

【ぎやか】「ひっ……ふ、浮浪者に……レイプされっ……！」

【男】「まさかの初体験がレイプかよー！ しかも浮浪者相手って最悪じゃねえかー！」

【男】「もう何も遠慮する必要はねえな。俺ら流石に浮浪者よりはマシだからよー！」

【ぎやか】「やっ！ やめっ……！ そんなに動かしたらっ……！ ひぎっ……！」

男はさらに奥をかき回します。子宮口に指先が当たると、私の体がビクンと跳ね上がり……。

【ぎやか】「あっ……あああああ……」

《ふしやあああああああ……》

私は我慢しきれず、その場でおしっこを漏らしてしまいました。  
私の膣に指を挿入していた男は、慌ててその場から距離を取ります。

【男】「うおっー？ い、いきなり小便するんじゃないか……」

【ぎやか】「だ、だってっ……」

【男】「くそっ……少し小便がかかったじゃないか……最悪だコイツ……」

【男】「いいじゃないか、その分徹底的にレイプしてお返ししてやるっせ」

おしっこが止まった後、私は壁に押し付けられ、男達に尻を向けるポーズに変えさせられました。



「ぎやか」「ひっ……!」

「男」 「小便漏らして随分大人しくなったじゃねえか。

○学生にもなって、人前で小便を漏らした事が

そんなにシヨツクだったのか?」

「男」 「安心しろよ。すぐにもっとシヨツクで、

もっと恥ずかしい目にあうんだからよ……!」

「ぎやか」 「あっ……あああああ……!」

そう言っつて、男のうちの一人が私の背後に近づき、

私のお尻を片手でがっちり押さえつけながら、

勃起したペニスを露出させ、膣口に近づけました。

いよいよレイプされるんだ……! そう思うだけで興奮し、

オマンコから愛液があふれ出してきます。



【男】「ほら行くぜ？ ○学生の生マン」頂きさー」

《ずぶっ…ずぶっ…ずぶっ…ずぶっ…》

「さやか」 「ひぎっ… ああああ…」

【男】 「おお…流石は○学生！ 締め付けやべえな！」

男はそう言っで、「コンドームも付けないままで私のオマンコにペニスをねじ込んできました。私は待ちに待ったレイプの瞬間に、無意識に体をビクンと跳ね上げさせ、軽く絶頂しました。しかし、当然ですがこれで終わりではありません。男はそこから、さらに私を突き上げてきます。



《じゅぷっ！ じゅぷっ！ ぬぷっ！ ずちゅん！》

「さやか」 「ひっ！ あっ！ ああああっっ！」

「男」 「さっ！ 具合良いわ… たまんねえ…」

「男」 「マジかよ、早く出して交代してくれよ」

男は私のオマンコをガンガン突き上げ、ペニスの  
鬼頭部分で私の膣を引っ掻き回してきます。

「視聴者」 「久々のガチレイプ配信キター！」

「視聴者」 「うわあの顔… マジでシコれるわ…」

そんな私の様子を見て、視聴者も盛り上がります。



男のピストンはさらに続き、執拗に子宮口を突き上げられます。  
フイストフアツクなどですっかり緩んでいる私の子宮口は、  
男の突き上げに合わせて少しずつ口を開いていき…。

《ぬほんっ！》

「ぎやか」「あひっ！ あっ…あああっっ♡♡♡♡」

「男」「うおっ！？ さらに深く突き刺さったぞ！

これどうなって…おおおお！？ 先端が  
分厚い肉に包み込まれるような…あああ！

男のペニスが私の子宮へと突き刺さりました。  
その快楽に、私はイキ顔を晒してしまいます。



【男】「い、一番奥の肉が…俺のチンポを啜えこんで離さねえっ！

なんだこいつ…！ き、気持ちよすぎるっ…！」

【さやか】「ひっ♡ あっ♡ ああああっ♡♡♡♡」

【男】「まさかチンポが子宮に突き刺さったのかよ…？」

【男】「女子○学生の子宮…ごくり…」

《ぎゅぽっ！ むほんっ！ むぷっ！》

男は無我夢中で私の子宮を突き上げ、かき回し、

その特殊な快楽をむさぼっていきます。

そして私も、子宮をかき回される快楽に、レイプ

されているという演技も忘れ、その快楽に酔いしれ、

声を上げ、体を震わせていました。



【男】「くそっ……！ が、我慢できねえ！ 出すぞっ……！ 受け止める……！」  
【さやか】「あっ♡ あっ♡♡ ああああっっ……♡♡♡♡」

《びゅるっ！ びゅるるるぶびゅるるるっ……！》

男は私の子宮内にペニスの先端を突き刺したまま、  
一気に大量の精液を吐き出してきました。  
その精液はあつと言う間に子宮内部を満たし、  
卵管へ流れ込み、膣の隙間から外へと吹き出します。  
その刺激で、私は大きく体をのけぞらせて絶頂し、  
愛液を垂れ流し、悲鳴のような声を上げました。  
そして、そんな私の快楽に追い打ちをかけるように、  
私の耳に視聴者のコメントが飛び込んで来ます。



「視聴者」 「うわっ…子宮に直接突っ込んで射精してるぞ、あの男…」

「視聴者」 「さやかちゃんあの顔見てみるよ。完全にバカになってるじゃん」

「視聴者」 「現役女子○学生で美少女の子宮に生中出しとか

羨ましすぎるだろあのレイプ魔…」

「視聴者」 「うわ、あいつ射精全然止まんねえww

どんだけ気持ちいいんだよwww」

レイプされて、子宮まで犯されて、中出しされて、

絶頂してしまつて、情けない顔を晒している。

その様子が、何万人もの視聴者に見られている。

それを想像するだけで、子宮への刺激が何倍にも

増幅され、私はさらに絶頂で体を震わせ、

愛液を飛び散らせていくのでした。



【男】「う、うおお…も、もう出ねえっ…搾り取られたっ…」

《ずるっ…ぬほんっ…んほっ…んぶっ…んぶっ…》

【さやか】「あっ…♡♡ はあっ…はあっ…♡」

私をレイプし精液を吐き出しつくして満足した男は、子宮口が食いついていたチンポを引き抜くと、膣口から大量の精液があふれ出して来ました。

【男】「へへっ…それじゃあ次は俺の番だな！」

そして私は、次の男に犯される事になりました。





【男】「おおおっ！ こ、こいつ滅茶苦茶締め付けやがる…！ 流石の学生ッ…！」  
「さやか」 「あっ…♡ やめっ…！ ひっ！ ああああっ♡♡♡」

《ずちゅん！ ずちゅん！ ぶちゅん！》

先ほどの男とは別の、筋肉質な男の極太ペニスが、何の遠慮も無く、私の中へとねじ込まれました。すでに半開きになっている子宮は、それを阻止しようともせず、あっさりと受け入れてしまいます。

そして男達は、代わる代わる私をレイプし、子宮内部に直接射精して行き、そして私自身も、その都度絶頂で体を痙攣させていきました。



【男】「はあっ…はあっ…流石にもう出ねえわ…搾り取られたっ…」


《ごぼっ…びちゃびちゃっ…》

男達は3回ずつくらい、交代しながら私を犯し、その精液を二滴残らず私の子宮に吐き出しました。私はだらしなく膣口も子宮口も開けたまま、その精液を溢れさせ、地面に水たまりを作ります。

【視聴者】「無様なレイプ配信最高だったよ！」

朦朧とする意識の中、視聴者のコメントが頭に響き、私は最後にもう1回絶頂しました。





その後、男達はしばらくタバコをふかした後、ぐったりと精液を垂れ流している私に向き直り、私の片足を掴み上げて来ました。

【ぎやか】「ひっ……あう……」

【男】「おら、いつまでぐったりしてんだお前は。」

レイプしてやったんだからお礼くらい言えや?」

【男】「その恰好でダブルピースしながら笑顔でお礼言えよ?」

全部、スマホで録画しておいてやるからよ」

【男】「そうだ、ちゃんと自己紹介も忘れるんじゃないやねえぞ?」

男達はニヤニヤと笑みを浮かべながら、私に命令をしてきました。

逆らう事が出来ない、というより、逆らう気の無い私は、震える指でピースサインを作ります。



【視聴者】「屈辱のお礼キタコレ！」  
【視聴者】「こいつらわかってるな！」

男達の命令に視聴者も大いに盛り上がる中、私は口を開き、屈辱の言葉を口にしました。

【さやか】「わ、私は水姫さやかっ…○5歳、○学校三年生ですっ…♡」

このお兄さん達を挑発して、レイプして中出しして頂きましたっ…♡」

【男】「へへっ、無様だなあ？ 大人をバカにするからこういう目にあうんだぞ？」

【男】「また今度レイプしてやるよ、嬉しいだろ？ レイプ大好きさやかちゃんよ？」

【さやか】「は、はいっ♡ ごめんなさいっ♡ 嬉しいですっ…♡」

プライドも何もない屈辱の姿を、男達と視聴者に晒しながら、私は興奮で体を震わせていました。